

手をつなぐ貧困女性(上)

路上にも「格差」、探る支え

低所得女性の運搬の動きが広がり始めた。働く女性の4割以上が年間所得200万円以下。貧困で行き場を失う女性が増えている。そんな状況を打開しようと、28日には都内でホームレスやひとり親家庭の母、フリーター、無年金高齢者などの女性たちが初の「女性と貧困ネット」をつくる「立ち上げ集会」を開いた。手をつなぐ貧困女性の現場を、2回にわたりレポートする。(編集委員・竹信三恵子)

アイデアと手作りで収入源

東京都内の公園の林の中に、ブルーシートのテントが並ぶ。野宿生活の人たちが住む「テント村」。そのひとつがいちむらみ(さん)(37)の住まいだ。ここで昨年からの週1回、女性のホームレスらが交流する「ノラ」の会が始まったと聞き、訪ねた。

テント村は02年、不況やリストラで行き場を失った人々で賑わみ、一時は300のテントが並んだ。いちむらみさんは、東京芸術大学の大学院を卒業。大学の非常勤講師や絵画教室で絵を教えながら制作を続けていたが、年収は200万円もなかった。03年、友人の男性アーティストがテント村で暮らし始めたの聞き、お金に頼らない生活に共感して住み替えた。

だが、野宿や路上にも男女格差はあった。女性の姿は数えるほど。男性の保護がないと危険と忠告されたが、男性

会には2人が来ていた。スポンの上に何枚も重ね、椅子の上にスカーフを重ねた重畳備で「80歳はとうに過ぎた」と話す佐藤ミチさん(仮名)と、唯やかな半袖姿の中川和子さん(60)仮名)だ。

お茶を飲み、おしゃべりしながら布製生理用ナプキンを手作りする。体にやさしい製品を広げたいと、いちむらみさんが提案した。

「ノラ」はナプキンのブランド名で、イブセンの一人形の家の家出した主人公ノラとノラ猫からとった。佐藤さんが縫い、かわいいうれしさを中川さんは販売担当。女性の集会などに出向き、ひとつ千円で売ると。

女性は現金収入の機会も少

ない。仕事は返品回収など体力がある男性向けが主流。ナプキンは貴重な収入源だ。

「東京は毎日200円で炊き出しがあるからお金がなくて大丈夫と佐藤さん。教会などの食料の無料支給が増えた。中川さんは「衣服も炊き出しでもらえる」。

だから、情報は命だ。8月に東京・渋谷駅近くで起きた79歳の女性の「通り魔」事件について「この会に来ていれば追いつめられずすんだのに」と中川さん。「女同士助け合おうって、だれも教えたくないからね」と佐藤さんもつぶやいた。

※国税庁「民間給与実態統計調査(平成18年度)から

給与と階級別給与と所得者の構成割合	男性		女性	
	割合	人数	割合	人数
200万円以下	9.6			
200万円超400万円以下	29.7	436		
400万円超600万円以下	30.1			
600万円超800万円以下	15.7		38.0	
800万円超1000万円以下	17.0		13.2	
1000万円超	7.5		3.2	
1000万円超			1.0	
			0.9	

頼れぬ行政、夜も安眠できず

いつも元気な中川さんが、「本当は施設に入りたい。路上はつらい」と言い出した。

中学を出て工場に勤めた後、飲食店で住み込みで働き始めた。10年ほど前、不況で賃金が払われなくなり、女々で使われ続けて逃げ出した。

02年のホームレス自立支援法で、路上生活者は就労を自指して施設に保護され始めた。中川さんも施設に入ったが、同業者のいじめで何度も逃げ出した。2年前、疲れて保護を頼みに行く「泊屋」と断られた。「リビーターだから嫌われた」と思い、行政の窓口へ行けなくなった。

7月にノラに来た40代の女性もいじめで施設を飛び出し、いた。保護を求めて窓口へ行くと「ルールを守れない人は困る」と扱われた。付き添

ったいちむらさんが「いじめに対応できない行政に責任がある」と反論すると、もっと保護された。

佐藤さんは子どもと一緒に親を失い、日雇いで働いてきた。高齢で仕事がなくなくなり施設に入ったが、2カ月で「DV被害者でいっばい」と退去を迫られた。アパートも借りられず、路上に移った。

だが、女性の路上生活の危険度は、男性以上だ。

中川さんは新宿で新聞紙をかぶり、佐藤さんはファストフード店や街角で、横にならず座ったまま眠る。時間帯も通行人が減る終電後の午前1時すぎから始発の午前1時ごろまでだ。男性を避ける女性用トイレで寝る人もいる。

いちむらさんは昨年からは、「女性が路上でも寝られる方

法を考えた」と、テントを出て街頭で寝始めた。段ボールの上から通行人にけられる。男性のホームレスが一面を出せば人間だと思ってくれないと助言してくれたが、顔を出すと「死ねないの」と何度も声をかけられた。

女性の野宿を実感しようとして、今月下旬、ホームレス女性と渋谷駅前まで野宿してみた。段ボールの拾い方を教わり、寝袋を借りて寝る。男性がじろじろ見る。警備員に何度も「いってんださい」と起され、そのつど、傍らのホームレス女性の助言に助けられた。

07年の厚生労働省調査では、全国のホームレスのうち女性は3.6%。だが、路上の危険を避けて隠れざるをえない現状で、その実数は見え



テントの前で開く「ノラ」の会。隣合ういちむらみ(さん)(中央)とホームレスの女性たち(東京都内の公園)

東京・山谷での支援経験をもとに「赤いコートの女〜東京女性ホームレス物語」を出版した宮下忠子さんの話。不況や構造改革で、夫に頼れない女性たちの居場所だった住み込み職場などがつぶれ、女性も路上に押し出され

助け合い支援し連携を

ている。ホームレスの自立支援の基本方針に、女性については、婦人相談所などとの連携が盛り込まれたが、「矯正」の発想が根強い。施設を飛び出すことを否定的に受け止め、女性の側に立っていない。自立には、行政が「立ち直らせる」のではなく、当事者の女性たちが路上で互いに助け合う動きを支援し、連携すべきだ。

麦畑からお届けするパン屋です

大和田聡子著

著者は東京都目黒区にある自宅の一角を改装し、小さなパン工房「ワルン・ロティ」を開く。父親が開発に携わった国産の「コユキコムギ」を使い、おいしいパンを焼きたい。そう思い立ってから、夢を実現

するまでの歩みをまとめた。もともと評判の店を食歩くほどの「パン党」で、お気に入りの店のシェフから助言を受け、失敗を重ねながら技術を身につけた。小麦の品種改良の歴史を振り返り、各地で小麦の育成に携わる人も紹介。パンづくりへの情熱が伝わってくる。

(自然食通信社、税抜き1600円)

